

高梁川河口付近におけるトラフグ幼魚の出現状況

岡山県におけるトラフグの産卵場は備讃瀬戸周辺にあることが分かっており、生まれた仔稚魚は河口域や周辺の沿岸域でしばらく過ごし、成長した後、広範囲に移動します。

水産研究所では、トラフグ幼魚の出現状況を把握するため、高梁川河口付近の小型定置網の漁獲状況を2015年から継続的に調査しています。今年度も例年と同様に7～8月に最も多く漁獲され、その後次第に減少しました(図1)。また、今年のCPUE(1日1統当たり漁獲尾数)は過去5年間(2016～20年)の平均値の1.3倍となったものの(図2)、地元漁業者からは、昔と比べるとトラフグは随分減ってしまったとお聞きました。

国立研究開発法人水産研究・教育機構の調べでは、日本海・東シナ海・瀬戸内海系群のトラフグの漁獲量は2002年の356トンから2020年の163トンまで減少しており、資源水準は低位で減少傾向と推測されています。

このような状況から、資源回復の取組として、倉敷市児島、下津井地区では2016年よりふ化仔魚放流が行われています。この取組は、春に漁獲された親魚から採取した卵と精子を人工受精した後、受精卵を水槽で管理し、ふ化した仔魚を産卵場周辺海域へ放流するものです。卵管理や放流は漁業者が中心となって実施しており、今年度は5月に87万尾を児島、下津井地先に放流することができました。また、小型魚を保護するため、漁獲された全長10cm以下のトラフグを再放流することが漁業者により取り決められています。

今後とも、これらの取組を支援するとともに、トラフグ資源の回復のため、幼魚の出現状況の

把握に努めていきたいと考えています。

(栽培・資源増殖室 亀井)

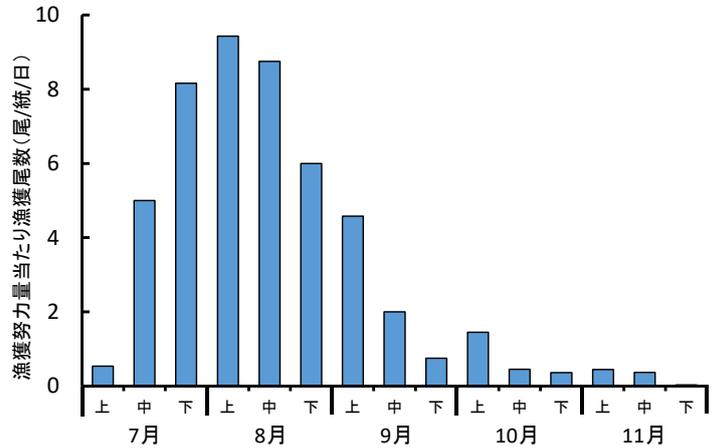


図1 トラフグ幼魚のCPUEの推移(2021年)

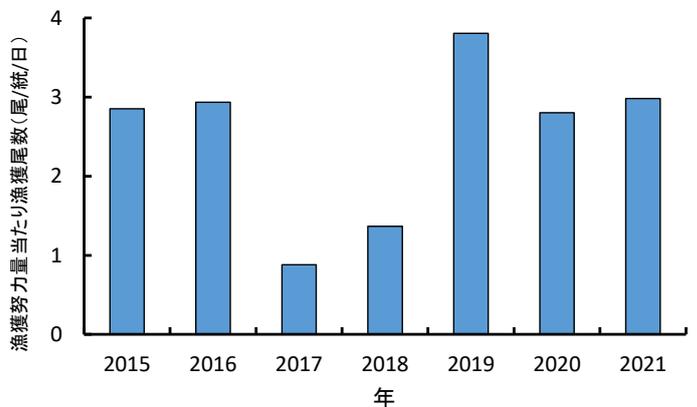


図2 トラフグ幼魚のCPUEの推移



図3 トラフグ親魚(左)とふ化仔魚(右)